

ロバの耳をした王子さま (ポルトガル)

昔むかし、あるところに、王さまとお妃さまがいました。ふたりには、子どもがいま
せんでした。それで、とてもさびしく暮らしていました。

あるとき、お妃さまは、三人の妖精を呼んで、男の子をひとりさずけてほしいとたの
みました。すると、九カ月して、男の子が生まれました。王さまもお妃さまも大喜びで
した。

そこへ、妖精たちが、生まれた子におくり物をするためにやって来ました。

一番目の妖精がいました。

「この子は、世界でいちばん美しい王子になるように」

二番目の妖精がいました。

「この子は、世界でいちばんやさしくて賢い王子になるように」

三番目の妖精は、他に何も思いつかなかったので、

「この子の耳が、ロバの耳になるように。思い上がって偉ぶることのないように」とさ
げびました。王さまはびつくりして、

「どうか、それだけはとりやめてほしい」とたのみました。けれども、妖精たちはすぐ
に消えてしまいました。そして、王子さまには、ロバの耳が生えました。

王さまは、王子さまの耳がロバの耳だということを、けっして人に知られないように
しようと思いました。そして、特別の帽子をこしらえて、王子さまにかぶらせました。
王子さまは昼も夜も帽子をぬぐことはありませんでした。

やがて、王子さまは、美しく、やさしく、かしこい男の子になりました。髪の毛も長
くなり、散髪をしなければなくなりました。王さまは、床屋を呼んでいいました。

「おまえに、王子の散髪をしてもらいたい。だが、帽子の下に見た物を、だれかに話し
たら、おまえを死刑にするぞ」

床屋は、王子さまの散髪をすませると、王子さまの耳のことを人に話したくてたまら
なくなりました。けれども、もし人に話したら、死刑になるのです。床屋はだまってい
るのが苦しくてたまらず、教会に出かけて行って、神父さまに相談しました。

「わたしは、ある秘密を知っています。それを人に話したら死刑にすると、王さまが
おっしゃるのです。でも、わたしは、その秘密を話したくて話したくて、苦しくて死に
そうです。どうすればいいでしょう」

神父さまはいいました。

「山奥の谷間に行って穴をほり、穴の中に向かって、思い切りその秘密をしゃべってご
らん。それからその穴をうめたら、土が秘密をかくしてくれるだろう」

床屋は、大喜びで谷間に出かけて行って穴をほり、何度も何度も、

「王子さまの耳はロバの耳」と、穴に向かっていいました。それから穴をうめて、心も
軽く晴れ晴れと家に帰って行きました。

さて、しばらくすると、床屋が穴をうめた所に、葎の草が生えてきました。羊飼いが

その葦のくきを切って、葦笛を作りました。その笛を吹くと、笛はこんなふうに鳴りました。

王子さまの耳はロバの耳

王子さまの耳はロバの耳

たちまち、うわさは国じゅうにひろがって、みんなが、王子さまの耳はロバの耳だというようになりました。そして、とうとう王さまにも、うわさが届きました。王さまは、羊飼いを呼んで笛を吹かせました。笛はやはり、

王子さまの耳はロバの耳

王子さまの耳はロバの耳

と鳴りました。王さまが吹いてみても、やはり、

王子さまの耳はロバの耳

王子さまの耳はロバの耳

と鳴りません。

王子さまの秘密を知っている者は床屋しかいません。そこで、王さまは床屋を呼びつけ、

「おまえが王子の秘密をばらしたんだな。死刑にするぞ」といいました。

すると、王子さまが、進みでて、

「どうか、床屋の命を助けてください。ぼくは、ロバの耳をしていても、いつかりつばな王さまになります」といいました。それから、みんなに向かつて、

「さあみんな、ぼくのロバの耳を見てくれ」といって、帽子をぬぎました。すると、どうでしょう。王子さまの耳は、もうロバの耳ではなくなっていました。

葦笛は、二度と「王子さまの耳はロバの耳」と鳴ることはありませんでしたとき。

原話：『新編世界むかし話集4 フランス・南欧編』山室静編著／文元社
再話：村上郁